



**Data** 2024-50

監督・脚本・製作・撮影・編集・  
音楽: ホン・サンス

出演: クォン・ヘヒョ / イ・ヘヨン  
/ ソン・ソンミ / チョ・ユニ  
/ パク・ミソ / シン・ソクホ

## 👁️👁️ みどころ

ホン・サンス監督作品の“会話劇”への特化性は、近時ますます進行中だ。27作目の『小説家の映画』(22年)、『シネマ53』318頁)の女性陣は、小説家、女優、書店の店主、書店従業員だったが、本作の女性陣は、4階建てアパートの所有者と実の娘から、レストランの店主、不動産業者へと広がっていく。そして、27作目と同じ主人公である著名な映画監督は、いつの間にかアパートの住人になっているから、アレレ、アレレ……。この映画監督、かなり女ガセが悪いの……？

そう思っていると、1章、2章、3章と続く各会話劇がそれぞれ摩訶不思議な形でエンドを迎える上、エピローグでは再び時間が1章まで巻き戻されているらしいから、こりゃ一体ナニ？この不思議な展開をみると、この2章以下の会話劇は夢？幻？ひょっとして、1960年生まれの本・サンス監督も還暦を過ぎると、織田信長の心境になったのかも……？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■27作目に続いて28作目を鑑賞！とにかく必見！■□■

韓国のホン・サンス監督の第27作目の『小説家の映画』(22年)、『シネマ53』318頁)に続いて、第28作目の本作が日本で公開！『小説家の映画』の評論本文のラストで私は、「今後ますます続くホン・サンス監督の快進撃をしっかり見守りたい。」と書いた。

『小説家の映画』は、クォン・ヘヒョ演じる著名な映画監督ヒョジンが、小説家のジュニ(イ・ヘヨン)、女優のギルス(キム・ミニ)、書店の店主(ソ・ヨンファ)、書店従業員のヒョヌ(パク・ミソ)らの女性陣と共演した会話劇だったが、本作もクォン・ヘヒョ扮する映画監督ビョンスが、アパートの所有者ヘオク(イ・ヘヨン)、娘のジョンス(パク・ミソ)、レストランの店主ソニ(ソン・ソンミ)、不動産業者のジョン(チョ・ユニ)ら4

人の女優たちと共演する会話劇だから、その面白さはきっと共通。したがって、「こりや必見！」だ。

## ■□■第27作目の舞台は書店！第28作目の舞台は？■□■

ホン・サンス監督の第27作たる『小説家の映画』の舞台は書店だったが、本作の舞台は、小さな4階建てのアパート。私は2001年以降、大阪市北区の裁判所近くの4階建てのビルを購入し、自己使用の法律事務所兼テナント賃貸物件として使用している。その敷地は約80坪だから、それまで20～30坪程度の3、4階建てのビルしか眼中になかった私にとって、かなり思い切った物件だった。

しかして、ビヨンスの旧友ヘオクが所有しているアパートは、敷地約15～20坪程度のこぢんまりした4階建てだから、私が10～15年間物色し続けてきた物件に近いものだ。ヘオクの案内によると、その使い道は、1階はレストラン、2階は料理教室、3階は賃貸住宅、最上階の4階はアーティスト向けのアトリエになっており、地下はヘオクの作業場と休憩所を兼ねた空間だ。著名な映画監督であるビヨンスが、何年も会ったことのない実の娘のジョンスを連れてヘオクのアパートをわざわざ訪ねたのは、大学で美術を専攻しインテリアの仕事を学びたいと考えているジョンスへの親心として、成功を収めたインテリアデザイナーであるヘオクに引き合わせようとしたためだ。

本作最初の会話劇は、娘ジョンスを連れてきたビヨンスが、ヘオクの案内のままにアパート内に入り、地下1階に座って、3人で再会の挨拶、娘の紹介、最近の仕事ぶり等々、ごく自然な会話を始めるところからスタートする。そんな中、突然ビヨンスの携帯が鳴ったことをきっかけに、「すぐ近くの打ち合わせだから、すぐに戻ってくる」と約束して、ビヨンスが自分だけ席を離れたのは、ある意味でビヨンスの計算通り・・・？そんな形でビヨンスが一人で出かけて行った後、ヘオクとジョンスは女同士でワインを酌み交わしながら、より親しく、より濃密に、ヘオクはビヨンスの監督論を、ジョンスはビヨンスの父親像を語り合ったが、ビヨンスは約束通りすぐに戻ってきたの？そこらあたりをはぐらかす(?)のが、ホン・サンス流演出の面白いところだ。そのまま尻切れトンボ的に、三者の会話とヘオクとジョンス二者による会話が終了すると、次の会話劇の登場人物は？

## ■□■最初の会話劇は地下1階！そこで“ぎこちなさ”は？■□■

ホン・サンス映画最大の特徴は、会話劇の面白さだ。山田洋次監督の「男はつらいよ」シリーズでは、おばちゃんの家が集まった、さくら夫婦を含む家族団欒の食事風景が常に登場するが、その会話劇では常に寅さんのリズムカルなしゃべりがメインで、常にそれが会話全体、食事全体をリードしている。そして、ある程度結論が出たところで「じゃ、今夜はこれでお開きにするか」との寅さんのセリフで締められることになる。

それに対して、1本の映画が丸々、さまざまな、手を変え品を変えた会話劇で構成されるホン・サンス映画の会話劇は、常に一種の“ぎこちなさ”が伴っているのが特徴だ。私はそのことを、『小説家の映画』の評論の中で“カリスマ性”とは？会話のぎこちなさに

も注目！」の小見出しで指摘したが、本作のパンフレットにある尾崎世界観氏（クリーブ・ハイブ）の『心地良い気まずさ』では、その冒頭で「ホン・サンス映画の中に流れているあの気まずい空気が好きだ。最近の作品では特にそれが顕著だと感じていて、映画の登場人物たちが交わす会話は、常にあの独特の気まずさに包まれている。」と書き、それをテーマとして解説しているので、それに注目！

父親ビヨンスと娘ジョンスの再会は久しぶりだから、インテリアデザイナーを目指しているという娘ジョンスの気持ちを父であるビヨンスが正しく理解できているはずがない。したがって、ビヨンスがジョンスをインテリアデザイナーの先輩で、小さいながらもアパートを所有し、インテリア全般に細心の注意を払っているヘオクに紹介したことは、理解できても、ビヨンスが3人の会話をリードできるとは到底思えない。したがって、3人の会話劇の途中でたまたま（折り良く？）仕事の電話が入ってきたのは、ある意味でラッキー……？

## ■□■次は2階での会話劇！新たな登場人物は？■□■

1階のレストランの店主であるソニは、2階で料理教室を開催するかたわら、1日1組だけの客も取っているらしい。しかして、本作の会話劇の第2ラウンドは、その2階でのビヨンスとヘオク、そしてソニの3人の会話劇となるが、それは客からの予約が急にキャンセルになった結果、実現したらしい。事情を知らない観客（つまり、はじめて本作をみる観客）は、最初の会話劇と、この第2の会話劇との連続性がわからないはずだが、この3人の会話を聞いているうちに、これは第1の会話劇から数日後のことであることがわかってくる。つまり、どうやら、あの日「すぐに戻ってくる」と言って中座したビヨンスは、約束に反して結局ヘオクのアパートに戻ってこなかったらしい。

しかるに、なぜ今日は再びビヨンスとヘオク、そしてソニの3人による会話劇が2階のレストランで実現しているの？その経緯は明らかにされないが、そこでは、ソニが強烈なビヨンス監督のファンであることが熱っぽく語られるので、それに注目！もっとも、「どの作品の、どんなところが好きですか？」との質問にソニは明確に答えないまま、とにかく熱っぽく「監督の映画はすごく楽しくて面白い。お酒を飲みながら何度でも観ます」「実物も素敵です」等と語り続けるので、ビヨンスもまんざらでもなさそうだ。

そんな話で盛り上がる3人の会話劇は、ヘオクが席を外し、地下1階に降りている間に更に弾むが、そこでビヨンスが突然、「スポンサーに出資を断られ、海外ロケの準備をしていた新作映画の企画がおじゃんになった」ことを打ち明けると、雰囲気は暗転し、急にシリアスなものに。更にワインの勢いもあって（？）、ソニが「神様を信じてます？」とつぶやき、潜在的な不安を打ち明けると、ビヨンスは「宗教は必要に応じて人が作り出したもの。恐怖心があるから必要になったんです」等と訳知り顔で答え、何やらわかったようなわからない哲学談議（？）に！そんな中でもソニは、「監督の映画は素晴らしい。私には最高の映画です」等と一貫してビヨンスを褒め上げたうえ、勢いよくワインを飲み干して突

然涙をこぼしたかと思うと、「もっとお酒をどうぞ。今日は私がおごります」と笑い出したから、アレレ、アレレ……。男は通常こんなエキセントリックな女に魅力を感じるものだし、ビヨンスのような性格の男なら、それはなおさら……。？

さらに、最初のヘオクとの会話劇の中で、ヘオクは開放的なバルコニーが備え付けられている4階のアトリエについて、「近いうち部屋が空くから住んでください。監督なら家賃は半額でいいですよ」と気前のいいことを言ってビヨンスを驚かせていたが、まさか、あれは本気？本作のストーリー展開では、ひょっとしてそんな事態に……？

### ■□■次の会話劇の舞台は3階だが、アレレ、そこには誰が？■□■

そう思っていると、続く第3の会話劇は、3階の部屋で同棲生活を送っている（こと明らかな）ビヨンスとソニの姿になるからビックリ！フーテンの寅さんは「旅から旅」への気ままな人生を歩んでいるが、それは寅さんの本職が“テキヤ”だからだ。しかし、ビヨンスは有名な映画監督だから、いくら妻と離婚し、一人娘のジョンスと長い間会っていないとしても、ちゃんとひとり暮らしの拠点があるはずだ。そう思っていたのに、アレレ、アレレ、いつの間にビヨンスはヘオクのアパートの3階と4階を借りし、ソニと同棲することになったの？確かにソニはビヨンス監督の映画が大好きな魅力的な女性だが、そうかといって、こんなに安易に引っ越しや同棲生活を始めていいの？私にはそんな疑問があるが、ホン・サンス監督はそんな疑問には一切答えないまま、ビヨンスとソニの同棲生活の厳しい現実を2人の会話劇の中で見せてくれるので、それに注目！

ここでの2人の会話劇を聴いていると、次のようにすべてが最悪だ。すなわち、

- ①ビヨンスの健康状態が悪く、サラダばかり食べている
- ②ソニのレストランは経営が苦しく、閑古鳥が鳴いている
- ③それなのに、ヘオクから家賃の値上げをほめかされている
- ④ビヨンスは外国での回顧上映にゲストとして招かれているが、新作を撮れずにいる
- ⑤郵便物を届けにきたヘオクにビヨンスは「上階からの水漏れを直してほしい」と伝えるも、ヘオクは何かと理由をつけて煮え切らない返事を繰り返す

そんな中、外出した件で揉めたソニがなかなか戻ってこないため、ビヨンスが苛立ちを募らせ、疲れ果てたようにベッドに寝そべっていると、いつの間にか戻ってきたソニが「私はあなただけを愛している」と語っていたが、この愛の誓いは幻聴なの？それとも夢の中の出来事なの？そんな不思議な映像の中、ビヨンスは「でも、俺はひとり暮らしが性に合うんだ」と呟いていたから、アレレ、アレレ、こりゃ、ビヨンスとソニの別れも早そうだ。

### ■□■次の4階での会話劇は、不動産業者のジョンと！■□■

韓国の女優事情に詳しい韓国映画ファンなら、本作に登場するたくさんの女優たちの顔と名前を知っているだろうが、私には、ビヨンスが次々と相手を変えて展開する会話劇の相手の女性の名前と顔、そして職業等がすぐに分からない。したがって、娘のジョンスを含めた、アパートの所有者たるヘオクとの会話劇を理解した上で、続く、急遽同棲をはじ

めた1階のレストラン店主ソニとの会話劇にビックリしていると、更に、次は4階のアトリエを舞台に、ビヨンスと付き合っている(らしい)不動産業者の女性ジョンとの会話劇になるので、更にビックリ！ソニとの同棲生活中、体調の悪いビヨンスはソニが勧めるままに肉食主義に同調し、サラダばかり食べていたが、今は明るく世話好きで、上質な肉や高麗人参をわざわざビヨンスのために持ってくるジョンとうまく話を合わせているから著名な映画監督ビヨンスもいい加減なものだ。また、彼の女好きというか、短期間で次々と女を変える女遍歴も相当なものだ。もっとも、ジョンの世話の下で、おいしい肉にパクついているビヨンスは幸せそうだが、シャワー室の水漏れを全然修繕してくれないくせに、郵便物を届けに来たとの口実で、「ジョンさんが来たみたいですね。最近は毎日？」と探りを入れてくるヘオクを、今やビヨンスは完全に鬱陶しいと思っているようだ。そんなビヨンスに対してヘオクも、「最近は映画を作らないんですか？ジョンさんによろしく」と皮肉たっぷりのセリフを吐いて立ち去っていくから、今や2人の仲は最悪だ。

そんな状況下、バルコニーに戻ったビヨンスが、「神様を見た話、もう一度聞かせて」とジョンからせがまれ、苦笑しながら「ふたりだけの秘密だぞ。他では話すなよ」と釘を刺しながら、自らが体験した摩訶不思議な出来事を語りだしたから、アレレ、アレレ。それは、ある白昼、4階のバルコニーに突如として荘厳な音楽が鳴り響き、うたた寝していたビヨンスの前に神様が出現したという話だが、この会話劇は一体ナニ？あなたは、これをどう解釈？

## ■□■エピローグは？この結末をどう解釈？人生は夢？幻？■□■

4階でのビヨンスとジョンとの間の摩訶不思議な会話劇が終わると、本作はエピローグの短い章になる。それは、アパートの外でタバコをふかしているビヨンスと、買い物帰りのビヨンスの娘ジョンズが鉢合わせるシーンだが、アレレ、これは一体いつのこと？これはひょっとして、最初にビヨンスとジョンズがヘオクのアパートを訪れ、ビヨンスが中座している間にジョンズとヘオクがワインを飲みながら話し込んでいた、あの時の出来事の延長なの・・・？ええー、そうすると、2章、3章、4章で見た、ソニやジョンとの会話劇は一体何だったの？

そんな思い(疑問)の中、スクリーンが暗くなると、ごく短い字幕が流れて劇場全体が明るくなってきたからビックリだ。さあ、あなたはそんな本作のエピローグとこの結末をどう解釈？

2024(令和6)年7月9日記